



# 佐賀城下竈帳の研究

松 本 四 郎

## 一 竈帳考

佐賀城下町の嘉永七年「竈帳」については、すでに戦後すぐに史料の利用が可能になってから池田史郎氏や山本文夫氏の紹介や研究成果が相次いで発表されて全国的にも注目されるようになった。

この竈帳の分析をふくめて佐賀城下町の研究を最初に進めたのは、池田史郎氏である。池田氏は「幕末の佐賀城下町について」をはじめ、佐賀県史や佐賀市史などにも関係の章節を執筆している佐賀城下研究の第一人者である。<sup>1)</sup>氏の論文は、竈の語義から竈帳作成の事情、そして人別帳との関連について論じ、さらに佐賀城下町の人口構成表、身別構成表、職業構成一覧などを作成し、その概要を紹介されている。

山本文夫氏の研究も、社会的な見地から、竈帳を武士・町人といった階級別・職業別の家族構成とか年令構成、あるいは年少労働力や女子労働力を克明に分析されている。<sup>2)</sup>

両氏とも竈帳が公開・利用されるようになってからすぐに行われた研究であるが、最近になって三上禮次氏の論文が発表されている。<sup>3)</sup>三上氏は都市としての佐賀城下町の就業構造を分析されて、その特性を消費地的な職業とか土木

表1 鍋島家文庫の竈帳目録

番号	史料名	差出者	年次	冊数
316-2	竈帳(東魚町・八百屋町・中嶋町・夕日町)	別当庄右衛門	嘉永7	1冊
3	六座町竈帳	別当喜兵衛ほか	同上	1冊
4	上今宿町柳町蓮池町竈付帳	別当兵衛	同上	1冊
5	林木町竈帳	別当清次兵衛	同上	3冊
6	白山町勢屯町米屋町竈帳	別当兵右衛門	同上	1冊
7	多布施町竈帳	別当久左衛門	同上	1冊
8	新町竈人別改帳	別当貞七	同上	1冊
9	道祖元町竈帳	別当栄左衛門	同上	1冊
10	本庄町竈帳	別当栄左衛門ほか	同上	1冊
11	高木町南側竈帳	別当清左衛門ほか	同上	1冊
12	高木町北側竈帳	同上	同上	1冊
13	紺屋町竈帳	別当八郎ほか	同上	2冊
14	下今宿町竈帳	別当八郎	同上	1冊
15	駄賃町竈帳	別当喜兵衛ほか	同上	1冊
16	唐人町竈人別改帳	別当貞七ほか	同上	1冊
17	呉服元町竈帳	別当文右衛門	同上	1冊
18	天佑寺町竈帳	別当治左衛門	同上	1冊
19	長瀬町竈帳	別当長右衛門	同上	1冊
20	寺町竈帳	別当良蔵ほか	同上	1冊
21	多布施新宿竈帳	別当清太ほか	同上	1冊
22	八戸宿竈帳	同上	同上	1冊
23	牛嶋町南側竈帳	別当清右衛門	同上	1冊
24	牛嶋町北側竈帳	同上	同上	1冊
25	中町竈帳	別当久左衛門	同上	1冊
26	上芦町竈帳	別当清左衛門	同上	1冊
27	岸川町人別竈帳	別当市郎右衛門	同上	1冊
28	伊勢屋本町西魚町竈帳	別当卯兵衛	同上	1冊
29	伊勢屋本町人別竈帳	別当市良右衛門	同上	1冊

建築業、そして運輸交通の従事者が比較的多いことなどを指摘している。

この史料は現在、佐賀県立図書館の鍋島家文庫に収蔵されている。『鍋島家文庫目録』の郷土資料編によると表1(4)のように三一冊の竈帳が現存している。

鍋島家文庫には、日記、親族帳、案文控、着到帳、村々拝借銀返納帳、郷村帳、狼藉一件記録、寺社差出・由緒書といった大名文書としては典型的な内容をもっているが、このなかで、城下町々の人別把握のため、あるいは課税賦課のための竈帳の存在は、やや違和感があることは否めない。地方関係の史料としては、村々目録、御物成目安、書上帳(郡方役所)、宗門人別目安、善民録といった、支配にかかわるいわゆる藩庁関係の史料は存在しているが、藩庁に差出された検地帳、人別帳といった類いは残されていない。こうした鍋島家文庫のなかに、竈帳のような町方の別当が作成した文書がはいっているのは、一つには佐賀の城下町々には後述するように手明鍵、足輕、被官などの武士身分が町人と混住しているということもあり、城下が農村とちがった位置を占めるとみられるからであろうか。いずれにしても後考をまちたい。

この竈帳の内容の一端を紹介しておく。次に紹介するのは「呉服町元町竈帳」の最初の部分である。

「 呉服町北側

一南口三間三寸 裏三間式寸 自宅

入捨八間七尺三寸 咄役

永淵嘉兵衛殿支配足輕

伊勢屋町 米綿 五拾三歳 中川 莊助

一浄土宗 荒物店 五拾壹歳 同 女房

佐賀城下竈帳の研究(松本)

大覺寺 右商売 式拾八歳 同 子良助

式拾一歳 同 女房

ノ四人 男式人

女式人

「

ここから読みとれることは、1 家屋敷の間口や奥行、2 身分記載、3 帰依寺の住所と寺名、4 職業記載、5 家族名と年令といったところであろう。このほかほぼ五竈で一組合がつくられており、組合頭などの記載があるところもある。また、明屋敷とか土蔵といった記載もみられる。帳の最後には竈数、人数合計、無竈となっている者の消息などが記されている。

内容的には、武士身分の者が町方に居住している点であろうか。こうした状況は他の城下には容易にみられないものである。こうした点を重視しながら町方の状況を具体的に一つ一つの町ごとに見ていくことにしたい。

そのさい、町ごとに1戸数、人口の数、そして身分別に住民の居住状況、2 手明鑑、被官、足輕などの武士身分の者の居住数と彼らの職業について、3 武士身分の者を含めた町方住民の職業構成、家間口、家族構成について、といった視点から記述していき、最後に城下全体の状況について総括したい。なお、無竈の調べについては章をかえて検討したい。

注

紀要』4 一九五六年

(1) 池田史郎「幕末の佐賀城下町について」『日本歴史』八

九号 一九五五年一月、同 「佐賀城と佐賀城下町の形成」『佐賀藩の総合的研究』一九八一年二月

(3) 三上禮次「竈帳による佐賀城下町の就業構造の分析」(九州芸術工科大学一般基礎教育系列研究論集一〇) 一九八六年三月

(2) 山本文夫「佐賀城下人別竈帳における階級別及び職業別家族構成について」長崎県立短期大学佐世保商英部『研究

(4) 佐賀県立図書館『鍋島家文庫目録』郷土史料編 一九八〇年一〇月

## 二 町々竈帳の分析

すでに紹介した竈帳の三冊をもとに各町の住民の居住状況をみていきたい。紹介する町々の順番は、前述した史料の登録順でなく、寛政期の郷村帳の記載順に、城郭を中心にして東(博多)側からはじめ、北側をとり、西側(長崎)にぬける街道ぞいにみていきたい。

### 1 下今宿町

蓮池方面から枝吉口を通じて佐賀の城下に入ると最初の町人町で、佐賀江川の上流にある今宿川にそって東西に長くのびる家並みを形成している。

この町の竈数は九五軒、このうち他の町では借家ともいっている割住居が一八軒ある。<sup>①</sup>このほか「右之内同家」というのが三九竈ある。町の人数合計は四六七人で、男は二三〇、女は二三七である。この竈帳に武士身分の表示がされているのは四七軒で、このほか有姓者が一ある。これらの合計は、全居住者の五〇パーセントに達し、町人と表示されているのは全体の半分である。

町の竈帳に登録されている住民の半数が武士身分とそれに準ずる者なのである。この人々の一覧を竈帳の記載順に紹介したのが表2である。このなかで多いのは足軽で二六、ついで被官の一〇が多い方である。そのほか陪臣の家来とか御中間、それに町人頭とか御用枀屋などの有姓者も入っている。

この表から二、三の家を簡単に紹介しよう。この町の竈帳には城下の町々をとりしきる町人頭蒲原新作の名がみえる。<sup>②</sup>蒲原は辻小左衛門組の足軽で表間口八、七一間の家屋敷を所持し、また町内に別に八、七八間口の出店を持っている。蒲原の家族は六人であるが、御用達で金銀の調達、年貢米の回送、炭薪の取引、酒醬油味噌の醸造にもかか

表2 下今宿町の武士身分竈一覧

表間口×奥行	身分	名前	家族数	同居人数	職業
4.9 × 6.8	江嶋弥平殿被官	徳久弥平	4	1	温鈍屋
2.5 × 6.8	星野惣右衛門殿組	伊東三平	7	5	宗門方下役
5.53 × 6.35	下村八左衛門殿組	川副治八	3		郡方下役
2.5 × 15.8	星野惣左衛門殿組	鶴嘉太夫	2		炭薪店
抱屋敷	田中左弥太殿被官	宮崎多七	2		舟さし
2.49 × 8.6	伊東三之允殿被官	城野平吾	3	1	
8.71 × 18.4	辻小左衛門殿組	蒲原新作	6		御用達
2.65 × 18.26	御中間	宮原新作	6		
7.15 × 18.5	鍋島左太夫殿被官	片淵栄助	8		材木屋
8.42 × 19.0	北原有右衛門殿組	砥川市郎	7		穀物店
6.3 × 19.2	村山尉右衛門殿被官	安永喜助	3		材木屋
9.87 × 18.9	田中左弥太組	小副川嘉右衛門	3	1	御蔵番米管 方下役
4.34 × 18.87	嘉村治兵衛組	浜副幸右衛門	5		穀物店
専光寺長屋	生野孝之助殿被官	藤崎次七	2		
5.4 × 18.2	池田理左衛門殿組	成松儀右衛門	3	1	俵改
3.7 × 18.1	横山平兵衛殿組	西村半助	7	2	年行司下役
4.84 × 18.1	福地寿兵衛殿組	吉村三郎兵衛	3	4	
割住居	石井昌太夫殿被官	中嶋小平	4		日雇稼
2.6 × 18.2	藤崎五左衛門被官	田中卯右衛門	4		日雇稼
3.44 × 8.0	小川市左衛門殿組	山口勝十	5		あら物店
7.5 × 18.8	関千左衛門殿組	藤井儀兵衛	3		御用炭屋
4.15 × 18.7	志摩守殿家来	織田善兵衛	5	3	御山方御用 屋
割住居	青木八郎兵衛殿組	木下重蔵	3	3	穀物店
2.39 × 18.1	石井六郎左衛門殿組	江口伊兵衛	3	2	畳屋
2.67 × 18.05	川瀬孫之允支配	古川依兵衛	9	1	問屋
2.97 × 13.9					
2.99 × 13.54	年田大八郎殿組	遠藤三蔵	3	2	陸荷問屋
4.63 × 14.0	町人頭	千綿弥左衛門	5	3	問屋
4.1 × 18.4					
7.7 × 18.45	三上新九郎殿組	高橋伊助	4		問屋

表間口×奥行	身分	名前	家族数	同居人数	職業
5.38×18.9	手明鍵吉谷一郎助殿弟	吉谷玄道	3		医師
4.0 ×19.0	戸田孫兵衛殿組	大財卯右衛門	7		小間物店
4.38×18.7	森八左衛門殿組	増田直助	3		あら物店
3.63×18.67	御用樋屋	毛利八郎兵衛	8		
4.87×18.6	内記殿足輕	馬場左平	4		八百屋
2.12×18.06	秀嶋才吉郎殿被官	秀嶋伊右衛門	5	1	豆腐屋
割住居	永淵嘉兵衛殿支配	西川宗助	5	2	御絵図方下役
裏屋敷	中嶋太郎左衛門殿組手明鍵	池田源一郎	6	2	
3.18×19.1	河野四郎兵衛殿組	鳥谷吉右衛門	7		八百屋
3.79×19.2	川瀬孫之允殿支配	坂田与平	8	1	酒屋
2.5 ×19.3	越山左衛門殿組	江嶋儀平太	7	1	菓子屋
4.47×19.5	山本伝左衛門殿組	久保儀平	4	5	御絵図方下役
4.01×6.7	八並次郎助殿組	高柳作兵衛	3	4	水納細工
4.18×19.08	小川市左衛門殿組	副嶋作平	6		
2.5 ×5.9	小代清兵衛殿組渋谷愛助親	渋谷長兵衛	2	1	豆腐屋
2.45×5.82	渡辺馬之允殿組	横尾和平	2		肴屋
3.0 ×5.9	井上丈左衛門殿被官	本吉伸助	4		炭薪店
割住居	福地助之允殿組	久米伝蔵	5		皿山教導所下役
4.74×5.1	福地寿兵衛殿組	武藤林蔵	4	1	温鈍屋
5.4 ×4.75	深堀八左衛門殿組	八谷勘作	3		太物店
0.59×3.4					
4.25×3.4	久保六郎助殿組	生野市蔵	7	1	穀物店
請縁場	副島権左衛門殿組	谷口袈裟次郎	3	2	小売店
町人	42竈				
寺	1竈				
明屋敷	1竈				



わっていた豪商と知られている。町内には町人頭で問屋の千綿弥左衛門も居住している。

また竈帳の冒頭に出てくる徳久弥平は、江嶋六郎の被官で家族は女房と子二人の四人と、同家として一人を抱えている。職業は温飩屋で同家の金作は御火術方手男という職についている。伊東三平は星野惣左衛門組の足軽で女房と子五人の家族で、同家の原田和右衛門は石井九郎衛門殿組に所属している。伊東の仕事は宗門方下役で、原田は米管方下役である。竈帳は、この徳久と伊東の次に炭薪店を営む町人半助家の記載があり、次いで表2にもどって郡方下役の川副の記載がみられるのである。

この紹介からわかるとおり、佐賀の城下では武士身分の者が集団をなしているわけではなく町方に町人と住居が入り混じっているのである。しかもこの武士身分の者は郡方下役、御蔵番、俵改めといった、藩庁の仕事に従事するだけでなく、問屋、陸荷問屋、炭薪店、穀物店、材木屋、荒物店、畳屋、小間物店、八百屋、豆腐屋、酒屋、菓子屋、そして日雇稼ぎといった職業を持っているのである。つまり、佐賀城下の町方居住の武士身分の者は、上は御用達とか問屋から下は日雇稼ぎにいたるまで、一般には町人の仕事と見られる職業に従事しているのである。

ではこの町の町人身分の者はどんな職業に従事しているのだろう。竈帳には町人の家屋敷所持者として炭薪店、酒屋、古道具店、温飩屋、髪結などが記載されている。そして、割住居は日雇稼ぎ（七軒）、舟さし（七軒）といった仕事をしているのが多く、また豆腐屋、炭薪売りなどもいる。武士身分の者の職業と比べると物売りや労働力販売に従事する者が多いかという印象をうける。

## 2 紺屋町

佐賀城郭の東側にあつて、紺屋川にそつて南北にのびる町並みで、下今宿町とは南側で接している。嘉永七年の竈帳にみえる竈数は東側が一〇六軒（うち割住居は一五）、西側が二三五軒（割住居が二四）で、合計すると二四二軒

という大きな町である。人数は一一一四人で男女はそれぞれ五八〇、五三四である。

武士身分は九四軒（西側が三六、東側は五八）で全体の三九パーセントにあたる。これにたいして町人は一四五軒で、五九パーセントである。下今宿町よりはやや町人が多いといえる。この武士身分は、下今宿町と同じく主なものゝ足輕の四五、ついで被官が三三である。東側の竈帳と西側のそれとは特に大きなちがいは読み取れない。しいていえば手明鍔が西に多い程度であらうか。手明鍔というのは侍と足輕などの中間にあつて、町方に住む武士身分の者としては地位が高く、普通は職業をもつていないとだけ指摘しておく。<sup>③</sup>

武士身分の者の職業は、水路を利用する炭薪店とか穀物店を営む者もみえるが、むしろ職人の鎧師、檜物屋、髪結石工、そして日雇稼ぎ、主人方奉公、塩売りなどに従事しているのが目だつてゐるといつてよいだらう。この傾向は武士身分で割住居に住む人々の場合でも同じである。

この紺屋町の様相を町人層を含めて知るのには恰好の町絵図がある。<sup>①</sup>天保一五年九月の一町限りのもので地割と地主名が記されている。これを参考に各丁目の様子を見る。下今宿町から北に道すじがかわるとすぐに五丁目の家並みが連なつてゐる。まず入ったところの東側には表間口八間の穀物店と御山方御用屋を兼ねる町人兵助の店がある。家族は七人である。道路を挟んで西側には表間口六間余で日雇稼ぎと果物店を兼ねる町人半七の店がある。家族は五人だが、そのほかに同家として「不時手男」の仕事をしている年寄り一人を抱えている。五丁目には間屋、穀物店、炭薪店などが目だつてゐて、前にみた下今宿町に接して商業が盛んなどころという印象をもつが、実際はこうした家は多くない。この五丁目の地面は四五で、この表間口を平均すると三、四四間である。前述した兵助や半七などは大きな家なのである。こうした家に割住居がおかれていることが多い。兵助の「右屋敷之内割住居」として張玄一殿組の合川良平が住んでゐる。仕事は徒罪方下役である。同じく半七の家も割住居に納富六郎左衛門殿組の岸川清左衛門が

六人家族で炭薪店を営んでいる。五丁目の大きな表間口をもっている家も実際は割住居をもっていることがわかる。だからこの町の住民も染屋、苳刻み、髪結といった職人とか煮売屋などの小商人、そして日雇稼ぎなどがけっこう多い町ということになる。

次いで四丁目にはいつてみよう。ここも五丁目と同じで穀物荒物店、穀物仲買などが目だっていて、表間口の平均も四、三四間と五丁目よりやや広い。ただこの四丁目も武士身分のなかの手明鎗を除くと表間口の広い家はほとんど割住居をもっている。住民には左官などの職人仕事や日雇稼ぎなどを生業としているのも多い。三丁目の表間口の平均は四間であるが、広いところはやはり割住居が置かれている。ただ、西側の表間口一五間の材木屋・質屋の蛭川藤蔵（陣内幸右衛門殿組）の場合はまったく割住居をもたない。この材木屋は、三丁目の東側に多い大工の存在ともかわっているだろう。

ここを通りすぎて二丁目に入る。ここには安楽寺という寺がおかれている。この寺の二一間余を除くと酒屋とか木挽といった職業の家が大きい表間口をもっている。二丁目全体の間口平均は四、一一間で、こうした家のほかは問屋とか穀物仲買も居住しているが、大工や木挽などが主なものである。最後には牛嶋町に接する一丁目の状況をみよう。ここの表間口の平均は三、四間で、広い間口をもつのはだいたい割住居をもっている。なかには木挽や大工とともに果物店、鍋釜店、醤油・足袋屋といったような日常生活品を商う人々が多いことを指摘できる。

この町の絵図などを参照すると、町内部で表間口を広く所持している者と割住居の者の居住状況を概観することができるのが興味深い。

### 3 材木町

城郭の東にあって、紺屋町の西側に川をはさんで南北に走る町並みが材木町である。

嘉永七年の竈帳によると、竈数は三一二軒で、うち寺二、社家一、山伏一が含まれている。また明家が八、物置も一二含まれていて、実質的には二八八竈となる。この竈の人数は一五一九人で男は七七二、女が七二八で、城下きつての大きい町である。

材木町の住民のうち武士身分の者は一八五軒で、全体の六四パーセントになる。材木町での武士身分の者の全居住者の比率はこれまでみてきたなかでは最高である。この武士身分のなかで一番多いのが、足輕の七八、ついで被官の四〇である。あとはぐつと少なくなつて歩行の一三、支配の一、家来の九などである。

この武士身分の者を地主と借家人にわけてそれぞれの職業を記載し、また町人も地主と借家人にわけてそれぞれの職業を記した表3を作成した。

これら武士身分のなかの地主の職業を、役所の仕事や医者などの公務、呉服・材木・穀物などの商人、鍛冶や大工などの職人、それに生活用品や日雇稼ぎなどに従事している人々といった順番に記載してある。この表をみて住民のなかで武士身分の地主の比重が大きいことを認めるだろう。とくに商人のところは重要なものがほとんど集まっていることがわかる。それに次ぐのが武士身分のなかの借家人が営む商人である。職人はどこにも同じように展開している。そして町人は、地主と借家人を問わず、日雇稼ぎや川船さし、賃引などの単純労働に従事しているのが多いのに気付かされる。この材木町の住民の職業構成は武士、町人の身分別に対照的に描きだされているといえよう。

表間口などから判断すると、武士身分の地主で商人がやはり大きい、御用鍋釜蠟燭髪付其他、御用達呉服店質場、染屋、醤油屋味噌酢、醤油屋麴屋、穀物類塩荒物店、材木屋などの商人が頭抜けて規模が大きいといえる。これらに対してこの町の一四八軒の借家は、紺屋町とちがって地主が居住していない一つの地面に五、六軒の借家がまとまって居住しているのが注目される。町の東側の竈帳には、表間口が二一間の地面に借家が七軒、同二九間余の地面に借

## 〔武士身分 借家〕

組内勤 3, 内治, 外科, 針医 2, 長崎詰 2

穀物石炭店, 穀物類其外, 穀物荒物店, 穀物打綿店, 米屋塩売, 荒物店米屋 2, 荒物店, 足袋股引果物店, 小間物店, 炭薪店, 焼物店, 古手店, 古道具店, 煙草店出店, 仲買

彫刻師, 櫛笄細工, 金具細工 2, 表具師, 塗師職 3, 桧物屋, 乗物師材木屋紙合羽, 乗物細工足袋股引仕立物, 足袋股引 2, 大工職 5, 大工饅頭店, 畳細工 2, 左官, 塗師, 桃灯屋, 蟬燭作り, 莨刻, 栓突莨荒物店, 線香作深堀詰, 線香作深堀詰, 線香座手伝, 線香作り果物店

饅頭店, 餅おこし, 油売り果物店, 肴店 2, 豆腐屋 2, 豆腐店家葺き, 温鈍屋, 風呂屋 2

酒場手伝飴商売, 川船さし

## 〔町人 借家〕

穀物店, 穀物店其外, 穀物豆腐屋荒物店, 荒物油店, 炭薪店 2, 酒屋染屋, 古手店饅頭店, 古手売, 古道具売, 炭売 2, 丸散荒物

彫物店, 三味線細工, 三味線稽古, 髪付拵果物店炭薪商, 作り亀屋, 作り花屋 2, あめかた屋, 栓突莨店, 煙草店, 煙草刻, 紅染屋, 鍛冶, 仕立物, 桧物屋, 大工職 4, 座打, 瓦葺, 畳表荒物店, 傘張, 髪結 3

米屋油店, 肴店 2, 肴売, 昆布作り, 青物売, あめ屋, うどん屋 3, うどん屋肴店, うどん売り, 果物店日雇稼

酒屋手伝 2, ほうろ, 呉服手代, 筑前通り, 川船さし 3, 賃引 3, 抱方方日雇小頭, 修理方日雇, 日雇稼 6, 日雇稼果物店, 日雇稼塩売, 御肩替日雇稼飴屋, 易引

表3 材木町住民の身分別職業一覧

〔武士身分 地主〕

御用達鍋釜蠟燭髪付其外，御用達呉服店質場，御用杵屋  
手明鍵2，組内勤，江戸詰医師，医師，内治3，内治針医眼科，外治，針医3，  
評定所警固，代官所下役2，郷普請下役，郡継札高，御進物方付役，教導所師範  
方，

太物小間物店，太物荒物店，呉服店質場2，呉服店，足袋股引古道具店，足袋  
股引塩炭豆腐屋，綿店小間物，荒物小間物店，荒物桧物細工，炭薪塩店，材木屋，  
材木屋古手類質場，古物荒物其外，穀物類荒物仲買質場，穀物炭薪店出店，穀物  
類塩其外荒物店，穀物仲買，仲買穀物店，諸国問屋仲買，仲買2，畳表類紙筆炭  
類，蠟燭筆紙墨店，薬種店，質場

鍛冶3，きせる金具細工2，金具師，矢師，仏師屋，琴三味線細工，塗師蒔絵  
師，表具師3，桧物屋2，桧物細工，染屋4，仕立屋小間物店，仕立屋2，大工  
棟梁，大工職，大工職作り花，瓦屋川船さし，瓦葺，家葺，畳細工2，作り花2，  
葺其外，栓突葺店，賃引2，日雇稼果物店

米屋荒物店，醤油屋味噌酢，醤油屋麴屋，酢屋，果物店醤油売，果物店2，麴  
屋打綿焼物穀物店，焼麴店，豆腐屋，豆腐屋肴店産売，豆腐屋肴店2，葛若屋干  
物其外，干物店湯葉屋，菓子店，菓子店出店，菓子作り，餅屋，饅頭屋，饅頭屋  
干皮，饅頭店2，煙草屋2，葺売，肴店，煮売屋

僧侶，盲人，記載なし

〔町人 地主〕

有田代官所遣前，修理方手男

穀物店炭薪其外，穀物荒物酒場店，七島表産屋，荒物其外店，油薪店，古手物  
出店

足袋股引餅おこし，金具細工，金具細工，桶屋，桶細工，桧物屋，大工職3，  
畳細工

果物店，塩肴売日雇稼ぎ，塩売り，肴物饅頭屋，饅頭屋，餅屋

縫洗濯，賃引，日雇稼2，日雇稼綿打ち，日雇稼荒物豆腐屋，酒場手伝  
山伏，記載なし

家が七軒、同一三間の地面に借家が三軒、同一八間に借家が三軒、といったように集住している様子がうかがえる。こうした傾向は三冊の竈帳のうち下西側の竈帳に特に多くみられる。

なお、この町の竈帳には材木細工場、材木小屋、線香細工場といった加工場のような施設が見えることは注目されよう。材木町は町名のように材木を扱う町人がいたところというより、武士身分の商人層で規模の大きいのが居住していると同時に、細工場などの施設がある町と特徴づけることができよう。

#### 4 牛島町

博多からの長崎街道を東から城下に入って構口橋を渡ったところが牛島町である。町は城郭の北東に位置し、家並みは東西に走っている。

現存する嘉永七年の竈帳から牛島町の竈数をみると九八軒で、南側が三三と北側が六三である。人数は四三一人、男は二二五、女は二〇六人になる。このうち武士身分の者は五二であるから六九パーセントになる。その内訳は、足軽が二六、被官が一三である。その他は歩行が三、家来が二といったところである。

これらの武士身分の者の職業は、醤油屋、御用達・質場、水囊店・笠屋、打綿荒物店などの表間口が広く目だっている。このなかの御用達・質場は、表間口一一間余と隣接する地面に五、七間余の物置蔵を持つ深江助右衛門殿組足軽の武富大右衛門で、金融業を営み大阪回米を行った御用商人として著名である。<sup>(3)</sup>家族はほかに手明鑓の武富丈一郎、吉野梅次郎、村山長右衛門の家族を同居させ、計一三人である。このほか武士身分の者の多くは職人（大工、藍染屋、金具細工）とか、商人（穀物店、豆腐屋、丸散屋、提灯屋・笠屋、酒屋）、そして日雇稼ぎ、役所勤めである。

町内の主要な地面は武士身分の者が所持しており、借家人は二〇軒のうち町人は一四と多い。これらの借家人は、酒屋が広い間口をもっているほかに、穀物店、畳屋、肴店などであるが、こうした借家の町人が一地面を借りている

のと、借家が何軒もまともまっているのがある。なお質場や酒屋のなかに隣接する地面をも借地して物置や酒造場としているものもある。

#### 5 上今宿町

牛島町の西にあつて、今宿町から分離して上今宿町ができたのは慶長年間といわれる。この町に続く柳町、蓮池町と別当が同じで、両町とは街道にそつた町で町の規模が小さいためか日常的な関係は深かつたようである。

この町の嘉永七年の竈帳には二四軒で人数は一一七人である。このうち武士身分の者は一四軒で、全体の半分を占めている。なお借家は五で、全体の二〇パーセント強と少ない。武士身分の者は足輕が一〇、被官が三、歩行が一である。これら武士身分の者の職業は商人がほとんどである。畳表・苧煙草・其外、太物荒物・小間物店・唐物座札といった商売をしているのが多い。他の町に多い職人とか小商人はあまりいない。この武士身分の商人層を主軸にして町人層も肴干物（四軒）などの営業者が居住している。また他町からの蒟蒻店とか煙草店の出店があるのも、街道ぞいの商人の町といった性格が現われている。

#### 7 柳町

城郭の東北に位置して上今宿町に接する長崎街道ぞいの東西にのびた町である。嘉永七年の竈帳では四九軒、二二人である。うち武士身分の者は二六であるから上今宿町とおなじ半分くらいの比率である。その内訳は、足輕は一七、被官は四、家来が三、あと歩行、中小姓、殿内、支配がそれぞれ一である。なお借家人は二二で、全体の四四パーセントになる。

武士身分の者の職業としては、表間口が一二間余の石炭質・太物店とか、同じく七間余の質屋などが上層と思われるが、そのほかは畳細工、仕立て屋、肴物出売り、古道具店などとか、借家人（二三軒）が多い。また町人層にして



も左官、桶屋、大工、提灯屋といった職人が目立つ程度である。なお、この町には土蔵が四カ所もまとまって置かれているのも商人の町という性格を示しているよう。

## 6 蓮池町

上今宿町、柳町に接している、長崎街道が東西に走る町並みである。嘉永七年の竈帳に記載されているこの町の竈数は四七軒、二三五人である。このうち武士身分のものは二九で、全体の六〇パーセントになる。また借家人は一〇軒と少ない。

この武士身分の者は足輕が一五で半分以上になり、そのほかは歩行が五、被官が二、あとは中小性、手明鎧、支配、家来がそれぞれ一つずつである。武士身分の者の職業をみると、表間口一間余の穀問屋、同八間余の穀問屋・丸散屋などがある。ただ全体としては、仕立屋、煙草刻み、大小柄師などの職人層が比較的多いといえる。武士身分の者を除いた町人層の職業は、茶の売り、洗濯・その他、算盤屋といった仕事に従事しているが多い。

## 8 上苔町

城郭の北東に位置して、長崎街道に面しない、蓮池町の北側に東西にのびる町並みである。江戸初期の記録には上苔町の名はなく、寛政年間の記録には明示されている。

嘉永七年の竈帳によると、総竈数は七九軒で、人数は三五〇、うち男は一七五、女は一七三である。また武士身分の者は三一で、全体の三九パーセントで平均より大分小さい比率である。足輕が一七、被害は一〇である。これにたいし借家人は四一であるから、全体の五七パーセントをこえている。

武士身分の者の職業は、表間口九、八間弱の油屋や同じく八、五間の塩屋が目をひくが、多くは豆腐屋、大工、たばこ刻、桶屋といった小商人や職人である。借家人は、前述した材木町と同じようにまとまって一地面内に居住して

おり、日雇稼ぎ（二〇軒）などが多い。やはり裏町的な色彩のこい家並みを形成している。

## 9 高木町

この町は上芦町の北側にあり、それと平行して東西にのびた町である。この町は十間堀川の南岸にあつて長崎街道の道筋の変更により脇町となつてしまったところで、北側と南側に分かれて町並みが形成されている。

嘉永七年によるとこの町の竈数は一六九軒で、人数は七七〇人である。このうち武士身分の者は八六で、全体のほぼ半分にあたる。この内訳をみると、足軽が三七、被官も三二で、両者あわせると武士身分の全体の四分の三を占めることになる。あとは家来が四で、以下支配が三、徒士が三、その他である。

武士身分の者の職業は、表間口一四間余の酒屋・麴屋・酢屋とか、同じく一三間余の酒屋、同一一間余の醤油屋といった醸造業関係の家が表間口の広いところで、あとは表間口三間前後の家で借家に入るのは油売りとか茶の触売り、提灯張り、駕籠かき、日雇稼ぎなどになっている。町全体としては、落雁屋とか煙草刻みなどが注目される、なお、借家人は七六軒で集团的に居住している。これらは日雇稼ぎ（一九軒）を軸にして、酒屋部り、素麴作り、たばこ刻みなどの労働力販売や醤油売り、油売りなど小売り関連の小商人などが多い。

## 10 呉服町

城郭の北側にあつて、西側の蓮池町から続く長崎街道は呉服町に入ってから北方に曲がつて元町へ連なっている。この町には寛政期以後は本陣の所在地でもある。

嘉永七年の竈帳では八二軒、人数は三九〇人、うち武士身分の者は五〇で全体の六三パーセントである。なかでも足軽が二五と多く、次いで被官も一一と多い。そのほかは歩行が四、中小姓と家来が二である。表間口一五間余の銀判屋で質店の中元寺、掛屋として知られている野口丈次郎は南口に六間余、東口に四間余の間口の店をもっている穀

間屋、丸散座で、いずれも豪商として著名である。そのほかは太物、薬、炭薪、宿屋といった営業者が多い。

この町の借家は四五軒で、全体の五六パーセントになる。借家のパーセントは高いが、日雇いは少なく他町のと比べると小商人が比較的多いようにみうけられる。この町の本陣は一反歩余が除地となっている。また弘化四年に町方役所で買上げた「市中備米御蔵」がこの町に作られているのも注目されよう。

## 11 元町

城郭の北にあって、城下を走っている長崎街道の中心的な町並みであるが、家数は少ない。

この町の嘉永七年の竈数は四七軒で、人数は二五六人である。このうち武士身分の者は三一で全体の六五パーセントになる。内訳は足輕が一五、歩行と被官がそれぞれ六で、あとは家来、中小姓が二ずつである。

この町の武士身分の者の職業で注目されるのは宿屋職が四あることだろう。これはこの町にある「駅場」（除地約四畝歩）という馬継ぎ場の存在とか、隣の呉服町の本陣の存在ともかわって配置されたものだろう。この他にも馬立てとか馬士などを職業とする者もいる。また仕立細工とか御用仕立屋といった人々も目をひくといってよい。割竈は五と少なく、職業も仕立屋のほか太物商売、油屋といった小商人である。

## 12 東魚町

元町の南に直角に南北に走る町人町で、街道に面していないが武家地や町人町に囲まれている。

この町の嘉永七年の竈帳には、竈が三九軒で、人数は一七一人である。このうち武士身分のものは二八で七一パーセント強である。その内訳は足輕が一一、被官も一一と多く、あとは中小姓が三、家来は二である。

ところで、居住形態からみると武士身分のなかのちがいはそうないようだが、職業の分野などどうちがいが出ているかどうかを表4でみておこう。問題は足輕などと比べて地位の低いといわれる被官の職業である。

この町の足輕の職業からみていこう。呉服店米屋、反物荒物方紺屋、荒物綿店、酢醤油屋、穀物店、麴屋湯葉屋、御肴御用干物店などである。これにたいし、被官の職業をみると御用肴屋、肴店3、肴売、呉服売、米仲買、鳥屋、風呂屋酒屋、うどん屋といったところである。なお中小姓は表具師、干物仲買、肴店である。また歩行は深堀詰で、若狭殿家来は医師、鍋島辰之助殿家来は米屋である。あと一は身分記載はないが御駕籠である。

こうみると足輕が従事している職業は都市商業の多様な分野にわたっているように思われ、他方、被官は肴屋を中心として特化しているようである。このちがいは両者の身分の差が微妙に反映しているかもしれない。これを家屋敷所持と借家のちがいで、そして表間口の広さと関連させるとさらにはつきりしてくる、足輕の家は酢醤油屋の表間口一六間余とかまた一〇間近い間口の呉服売り、米屋などがある。全部自家所持者である。これにたいし被官の場合は風呂屋が間口九間五尺余と大きい、あとはほとんどが二・三間といったところで、しかも借家が二ある。なお中小姓と歩行は全部借家で、家来の医師は表間口七間余と大きい、あとの米屋は借家である。

この町の借家数は一六軒で全体の四一パーセントになる。こうした

表4 東魚町の武士身分内部の職業

竈数	48	
武士身分	28	町人 20
足輕	11	呉服店米屋、反物荒物方紺屋、荒物綿店、酢醤油屋、穀物店、麴屋湯葉屋、御肴御用干物店、肴売、産打、記なし、
中小姓	3	表具師、干物仲買、肴店
家来	2	米屋、医師
歩行	1	深堀詰
被官	11	肴問屋下取肴売、御用御肴屋、肴店3、肴売、呉服売、米仲買、鳥屋、風呂屋酒屋、うどん屋
不明	1	御駕籠

借家の職業は武士と町人身分ともに、職人や日雇い（三）、小商人などが主なもので、まとまって居住しているのはほとんどである。

### 13 八百屋町

元町の南側に平行する町並みである。嘉永七年の竈帳では一七軒の小さな町で、人数は八〇人である。このうち武士身分の者は一三で、全体の七六パーセントである。内訳は足輕は九、支配は三、被官も二である。この町でもっとも大きい間口をもっているのは町人の一九間余の肴店で、ついで足輕身分の酢醬油屋・唐物問屋・質屋の九間余である。なおこの町には町名とかかわる八百屋は一軒もない。染屋、鳥屋、肴屋、干物店などが居住している。この町の借家は三と少なく、薬種取次、荒物屋、髪結などである。

### 14 中嶋町

この町は城郭の北で、夕日町とは堀割を隔てた南北に走る町並みである。裏町で袋小路である。嘉永七年の竈帳では三二軒で、人数は一四九人である。うち武士身分は一六で、全体のちょうど半分である。主なものは被官が六、足輕が五である。このなかで足輕身分の米屋が表間口七間で大きいとみられる程度で、平均して二・三間の間口が多い。それも日雇稼ぎが一ときわだって多く、あとは小商人とか職人的な住民である。借家は七軒で、このうち日雇稼ぎは五軒と多い。

### 15 夕日町

城郭の北にあって、寛政期の郷帳に町名が確認できる町である。嘉永七年の竈帳では四一軒で、人数は一八七人である。うち武士身分は二二である。全体の四一パーセントである。なかでも歩行の酒屋が二六間余の表間口を所持している。また足輕の御用達・質屋の表間口が一五間余、歩行の御用賄方の表間口一二間余、また足輕の穀物仲買の一

○間余が目立つくらいで、あとは二、三間くらいの間口で大工、染屋、肴屋、酒屋といった職人、商人である。

この町は借家が一八と比較的に多く、そのうち七軒が日雇いになっている。あとはうどん屋とか提灯張替えなどに従事している。

## 16 勢屯町

元町と連なり、東側から北へおれて鉤形の街路をなしている。この町の竈数は、嘉永七年で四五軒、人数は二〇五人である。うち武士身分の者は三一であるから、全体の七〇パーセントにもなる。これら武士身分の者の職業のなかでは、表間口が一二間余の御用呉服・薬種丸散（足軽）とか同一三間余の薬種丸散座（徒士）などがあるが、全体としては荒物店、肴店、畳細工人といった日用生活用品関連の職業が多い。

この町の借家は二〇軒余である。この借家の者の職業は、紺屋、日雇稼ぎ、丸散出売りなどである。なおこの町には教導所が置かれている。

## 17 白山町

佐賀城の北側に位置している、長崎街道に面した、勢屯町と続き、西へ折れたところの東西に長い町並みをつくっている。慶長期以前の町のといわれる。

この町の嘉永七年の竈帳では七一軒で、人数は三三九人である。このうち武士身分の者は四五で、全体の六四パーセントである。内訳は、足軽が二六と頭抜けて多く、ついで被官が七で、歩行が五、支配が四と続き、あとは家来、町人頭が各二である。

この町には町人頭が二人いる、一人は表間口が一間余の武富忠蔵で御用達・呉服御用・丸散店を営んでいる。他は間口五間余の桂尾与平で菓子店である。この町には呉服、太物関係の商人が目だっている。足軽の表間口九間余の

上方呉服問屋とか代呂物問屋・呉服太物店などで、また筆紙墨・書物小問物、荒物店といった商人も見える。とくに書林といった書籍の販売店が三店もあるのは珍しい。

他方、この町の借家は三七で、全体のほぼ半分でまともって居住している。職業はやはり日雇い（三軒）、茶売、肴物の売りといったが多い。

## 18 米屋町

城郭の北に位置する町で、東西に走る長崎街道ぞいの町並みが展開している。

嘉永七年の竈帳に記載されているのは三五軒で、人数は一四四人である。このうち武士身分の者は一四軒であるから三八パーセントになる。内訳は足輕が七、被官が五、歩行が一である。この武士身分の者の職業は、料理人、弓師、うどん屋、染屋などである。

この町の借家人は八軒で、全体の二二パーセントと少ない。その職業は日雇稼ぎ（四軒）とか酢醬油などの売りなどである。

## 19 寺町

城の北部にあって、全体としては東西に展開している城下の町並みのなかでは北側へ突出して南北に走る町並みである。

嘉永七年の竈帳によると一一軒で、人数は五一三人である。このうち武士身分の者は四六である。全体の四一パーセントと比較的少ない。その内訳は、足輕が一七と多く、次いで多いのが歩行で八、被官も七である。もっともこれらの者の職業は穀物商売とか大工頭取などもあるが、鍛冶とか大工、瓦屋根屋、三味線細工といった職人層が多いといえよう。

町人は、武士身分の者と同じで職人が多いが、「上方より持下り代呂物売買仕候」(三軒)とか野菜物売り(六軒)といった小商人も多い。この町の借家はまとまって居住しているが、二六と多くはなく、日雇稼ぎや穀物売り(四軒)などが多い。

## 20 唐人町

佐賀城下の中央から北へつきでた町で、寺町の西側にあって南北に町筋が走っている、秀吉の朝鮮侵略のさいに日本へつれてこられた朝鮮人の居住地に由来するという。

嘉永七年の竈帳によると、竈数は一〇六軒、人数は四五〇人である。うち武士身分は五三で、全体のちょうど半分である。武士身分の者は、足軽が二八、被官が一四で、あとは支配三、家来三などである。その職業は、表間口一一間の御用達・酒屋、同じく一〇間余の御用石屋が、いずれも足軽の家で、染屋、米仲買、大工などが目につく程度である。

この町の特徴は、野菜売りが一二軒と多いことであろう。このうち九軒が町人の地面所持者で、あとは武士身分の地面所持者に二、町人の借家に一である。このほか日雇稼ぎが町人に九軒、武士身分に二軒ある、また湯葉屋も町人に四軒あり、武士身分の者の職業構成と比べると、農村部に近い町という性格をこの町人の地面持たちが一番反映しているといつてよいように思う、なお、この町には表間口二、五間の町人頭伊東源右衛門が居住している。

## 21 唐人新町

唐人町の北西に鉤形にのびた町、初期には唐人町や寺町とともに神野村に所属していた。

この町の嘉永七年の竈帳は八四軒で、人数は三七九人であった。うち武士身分は三四で、全体の四〇パーセントである。多いのは足軽が一五、被官一六である。これらの職業は、とくに目立つ家はないが、やはり野菜物売りに従事



するのが四一軒と圧倒的に多い。そして近隣の町と同じく借家が比較的少なく一八軒で全体の二一パーセントである。借屋人の職業は野菜物売りも多いが、綿打ちとか大工などがいる。

## 22 中町

城郭の北にあって、東西にのびる長崎街道にそった町である。

嘉永七年の竈帳によると、この町は一一三軒で、人数は五五四人である。うち武士身分の者は七五軒で、全体の六六パーセントである。ここでも足輕が三一で、被官の一九とともに多い。

この武士身分の者の職業で注目されるのは酒屋であろう。町全体では表間口が三、四間程度の家が多いが、一八間間口、同じく一一間余、そして八間余もある酒屋が三軒も見出すことができる。あとは表具師、大工などの職人とか炭薪売、綿売などの小商人が多い。

この町の借家は一五軒で、全体の一三パーセントである。これらを含めてみると、やはり日雇稼ぎ（一一軒）や野菜物売り（四軒）などが多いといつてよい。

## 23 多布施町

城の北西に位置して、中町と連なり、東西にはしる町並みのなかほどで長崎街道は南へ転じて伊勢屋町へ接する。

この町の嘉永七年の竈帳では六六軒で、人数は三五六人である。このうち武士身分の者は四九軒で、全体の七四パーセントになる。この内訳は足輕が一九、被官も一〇とここでも多く、ついで歩行が六、以下一、二程度である。これらの職業で注目されるのは、酒屋と御用染屋であろう。酒屋は二軒、御用染屋も二軒が表間口を大きくとつていて際だつていゝといつてよい。また川船さしという水上交通の従事者の数が多いことである。その数は町人もふくめると一一軒になる。この町の借家は四軒と少ないが、この川船さしのはかに日雇稼ぎ等に従事している。

## 24 伊勢屋町

城郭の北西にあって、伊勢大神宮の門前に東西にのびる町で伊勢屋本町に連なる。長崎街道に面していて近くに町人町や武家町がある。

嘉永七年の竈帳には七一軒、三二八人である。このうち武士身分の者は四八軒で、全体の六七パーセントである。内訳は足軽が二五で、被官は八である。あとは歩行が四などである。

武士身分の者の職業は、菓子屋とか蠟燭屋で御用の名のついているのが目だっている程度である。割借家は三一で四二パーセントと比較的高い。これらの職業は、日雇稼ぎ、職人、売り子などが主である。

## 25 伊勢屋本町

城郭の北部が長崎街道に面して南北に長い町並みで、上ノ丁と中ノ丁に分かれる。また、この町と点合町と西魚町の三町は同じ別当のもとにある。

この町の嘉永七年の竈帳によると五〇軒である。うち武士身分は二三で、全体の四六パーセントである。内訳は足軽が一五、被官は七と多い。これら武士の職業のなかでも、酒とか醤油といった醸造業関係の大きい商人がいる。その他は菓子店、魚物商売、諸職人が多い。

借家人は一軒で、その職業は染物上絵書職とか挑灯張職といった職人が多い。

## 25 岸川町

佐賀城の北西に位置して、長崎街道から外れた町並みになっている。嘉永七年の竈帳では八五軒、三五八人である。うち武士身分の者は三一で、全体の三六パーセントである。被官は一二、足軽が一〇、歩行が四などである。これらの職業は、平均して表間口が二〜三間の荒物店とか炭薪店、檜物屋、古道具売りなどで、武士身分の借家住まい（一

一軒)の場合には、物売りとか日雇稼ぎなどである。表5を参照されたい。

もっとも、この町は町人が他の町に比べて比較的多い。

この地面持ちの職業は職人層(大工2、左官2、畳師、縫物師など)とともに、日雇稼ぎが多い。なんらかの形で日雇稼ぎに従事しているのは一〇軒に達する。この傾向は町人の借家(二〇軒)の場合でも同じで、日雇稼ぎは九軒を数える。

## 27 西魚町

城郭の西に位置している。長崎街道から離れ、武家屋敷からあまり遠くないところにある。

この町の竈帳によるとその数は九三軒、四八七人である。うち武士身分の者は六一である。全体の六五パーセントである。内訳は足軽が三四で、被官が一四、歩行は七である。武士身分の者の職業は、魚物商売や呉服小間物・穀物などの諸商売などである。この町の借家数は一九で魚物(五軒)や日雇稼ぎ(五軒)などに従事している。

表5 岸川町住民の身分別職業一覧

〔武士身分 地面持〕	〔武士身分 借家〕
手明鍵2, 下目付, 使番, 代官所下役, 町方警護 綿屋2, 荒物店, 米屋, 炭薪果物店, 果物店茶売, 肴売 槍物屋, 菓子細工日雇稼, 瓦葺うどん屋, 木挽, 大工豆腐屋, うどん屋 日雇稼, 記なし	組侍2, 御絵図方下役 鉄砲師, 左官 野菜物売, 古道具売, 油売 日雇稼2, 手男
〔町人 地面持〕	〔町人 借家〕
大工2, 左官2, 畳師, 屋根割, 研師, 染屋炭薪, 取酒屋畳師, 菓子細工米糺屋, 丸散売子, 野菜物売2, 豆腐屋日雇稼 日雇稼6, 日雇稼髪結床, 手男3 記なし	代官所使前2 糺米屋2, 茶売竝日雇稼, 草請売 大工3, 桶屋, 左官 日雇稼8, 記なし

## 28 点合町

長崎街道に面した、人の出入りがかなり多い、町の中心地から離れている。町は東ノ丁と西ノ丁の二つに分かれている。

竈帳によるとその数は五九軒、二九六人で、うち武士身分は二四である。全体の四〇パーセントである。かれらの職業は、質商売とか刻莫商売、小間物売商売などが大きい方であろう。また呉服小間物商売や丸散商売の家がみえる。この町の借家は二二でまゝとまって居住して、日雇稼ぎ（五軒）が多い。

## 29 駄賃町

城の西側にあつて、長崎街道から離れた東西にはしる裏町で、脇街道すじである。

嘉永七年竈帳によると、この町の竈数は三九軒で、人数は一八九人である。このうち武士身分の者は一五で、全体の三八パーセントと少ない。被官が四、手明鎗が三、足軽が六などである。このうち手明鎗の三人を除くと特に目だった職業は見られない。全体としても小商人（取売、酒屋、醤油売）や職人（木挽、大工、紺屋）、日雇稼ぎ（七軒）などが多い。借家は五軒を数えるのみで、その職業も職人、小売人（畳師、綿打、肴物売り）などである。

## 30 六座町

長崎側の西側から佐賀の城下に入るとすぐの町で、長崎街道に面して東西にのびる家並みを形成している。町名は北面天満宮に属する穀物座などの六座があつたことに由来するという。

嘉永七年の竈帳には七六軒、三八五人が記載されている。そのうち武士身分の者は四二で、全体の五五パーセントである。内訳をみると足軽が二〇で一番多く、ついで歩行と被官がそれぞれ六である。組所属の職人も五いる。

武士身分の者のなかでは、やはり間口七間の酒屋が二軒が大きいほうだが、この町では、細工場を隣にもつ鉄砲台

師とか合羽屋・焰硝座、鉄砲細工などが注目される。また借家は一九軒で、これらを含めて町人は、大工、瓦細工などの職人や肴売、御金物売、くだもの売などの小商人、日雇稼ぎが多い。

### 31 長瀬町

長崎街道を西からくると城下の入り口にある。西は八戸宿に接し、東は六座町に連なる町並みを形成している。嘉永七年の竈帳によると一四〇軒で、人数は七〇四人である。このうち武士身分の者は六八軒で、全体の四八パーセントである。このうち足軽が三〇で一番多く、ついで被官は一〇、歩行が七である。

これらのなかでは、御用達・質屋の二軒とか鋳物師屋は表間口一〇間前後をかまえている。また蠟燭屋がまとまって三軒並んでいるのが気付く。しかし、何といってもこの町は隣の六座町とともに鍛冶関係者が多く居住していることであろう。鍛冶細工、鍛冶、御刀鍛冶、鋳物師屋、鋳懸屋、鉄砲請元竝酒屋などを合計すると三三軒を数える、これは隣接する築地にある大銃製造方の存在ともかわっているのだろう。

この町の借家は四〇軒で、これらの多くはやはり鍛冶関連とか日雇稼ぎ、そして戸障子売、肴売などの物売りが居住している。

### 32 本庄町

この町は城郭の西に位置している。町の東側を流れるのが本庄川である。嘉永七年の竈帳によると八〇軒で、人数は四四七人である。内訳は足軽が二二と多く、ついで被官が四、そして歩行、家来、手明鎗のそれぞれが三である。なかでは表間口が八間の酒屋とか諸国問屋客屋、あるいは酢醬油蠟燭といった営業者が注目され、また穀物とか炭薪商売といった近郊との接点の場にふさわしいのも若干見受けられる。

本庄川を利用する舟運関係は意外に少ない。高橋市船商売とか御早渡御船頭がみられる程度である。この町の借家

は少なく一八で、炭薪商売、木挽、日雇稼ぎが多い。

### 33 道祖元町

長崎街道から離れるが厘外津につながって海路から城下への交通路となっている。なお、この町までは寛政期の郷村帳に佐賀城下の町と記載されている。

嘉永七年の竈帳によると八七軒で、人数は四二一人である。このうち武士身分の者は五〇軒で、全体の五八パーセントである。主なものは足軽が二八、被官が一一などである。

これら武士身分の者の職業としては、表間口八間の酒屋のほかに質屋、材木屋、木挽、炭薪屋、大工などが目につく程度である。もっともこの町には材木小屋や炭薪小屋三ヶ所があるので、この存在に関連する職業が中心といつてよいかもしれない。町人もやはり大工などの建築関連が多いようにみえる。この町の借家は一九軒であるが、それらは素麺屋とかうどん屋といった飲食関係や各種の物売り、日雇稼ぎなどである。

### 34 多布施新宿

多布施町から分離してできた町で、街道の交通量の増加にともない宿場的な性格をもっているという。

嘉永七年の竈帳によると二六軒で、人数は一二九人である。このうち武士身分は一四で、主なものは足軽の一〇軒である。穀物店、大工、弦店などに従事している。町人層の職業は湯葉屋とか麩屋、焼き物屋などである。唯一の裏住居は日雇稼ぎである。

### 35 天祐寺町

佐賀城下から北西への出口で徐々に人口が増えていったところである。嘉永七年の竈帳では五〇軒で、人数は二二人である。武士身分の者は足軽が一七で一番多く、ついで被官が五である。それらの職業は特にまとまったものは

ない。それより御用毛鞠師とか絵書職など役所勤務の者などの多いのが目を引くが、そのほかは穀物、油屋といった店も多い。

この町の借家は一八軒である。日雇稼ぎとか各種の奉公人が多い。

### 36 八戸宿

城下の西の外れの町である。この宿の竈数は、嘉永七年の竈帳によると一七〇軒で、人数は八二五人である。このうち武士身分の者は九九軒で、全体の五五パーセントである。内訳をみると足軽が六二と頭抜けて多く、ついで被官が一二である。そして歩行が九、手明鎗が五、中小姓が三などである。

これら武士身分の者の職業は、いくつかの町のように特定の業種が存在するというような特徴はない。うどん屋、酒屋などの街道すじに多い職業もみられるが、それよりは綿屋、醤油屋、薬屋、小間物反物荒物店といった商人が比較的に多く、場末の町の様相を反映しているようにみられる。

武士身分以外の町人層は主に四〇軒の借家に入っているが、その職業は、色々出売りや唐芋売りなどの小商人とか、大工や築地日雇いなどである。

佐賀城下の町々の住民を嘉永七年の竈帳をつかって個々に検討してきた。この竈帳に記載されている三五六軒と一万四四〇八人の住民構成を検討することによって、あらためて城下の町々についていくつかの問題を見出すことが出来るように思う。

まず第一に注目されるのは、いうまでもなく町方に武士身分の者が居住していることである。おそらく土農工商という身分制が貫徹している江戸期にこうした士庶雑居という居住形態はきわめて特異であるといえよう。たとえば矢

守一彦氏の『都市プランの研究』にある城下町プランの変化を形態的に追っている研究をみても、計画的に設定された武士居住地域と庶民の居住地域が次第に崩壊し混住化していく過程は、まさに城下町の解体期なのである。<sup>6)</sup>

こうした観点で佐賀の城下における武士身分の者の居住を町々でみていくと、ある時期以降に形成された町方だけに居住しているとか、町外れの地域にだけ見られるといった、特定の限定された状況のなかでのものでなく、まさに全ての町々に武士身分の者が存在しているのである。しかも町人と同じ、というよりは主要な商工業に従事しているのである。

町ごとの全竈数と武士身分の者の数を提示してある表6をみてほしい。武士身分の者の城下全体の平均は五〇パーセント前後である。この比率より高いところは、ほぼ長崎街道ぞいの町々である。武士身分の者の居住が比較的少ないところは城郭の西側の町々である。これは武士身分の者の従事している商工業にとって、街道ぞいは条件がよいということからすると当然ともいえよう。

町々での武士身分の者の商工業は、特定の業種に限定されることなく、御用達から日雇稼ぎにいたるまで、ありとあらゆる業種に従事していることも注目すべきだろう。しかも主要な商工業のほとんどを占めているのである。そしてそれも武士身分のなかの地位によって差が出ているのである。東魚町で、足軽と被官のそれぞれの職業の性格、家屋敷の所持の有無、表間口の広狭、といった点をみると両者はあきらかに差がある。身分的には上位の足軽が被官より職業面でも優位な立場を保持していることは、各町住民についての記述からも読み取ることができる。武士身分の者の職業が多様さをもって展開しているということは、武士身分上位の者は商人に、下位の者は日雇い稼ぎに従事していることにより、必然的に形成されることになったといえよう。

さて、上層の町人は町々にどのように展開していたらうか。この城下での表間口の平均はほぼ三、五間程度であ



表 6 佐賀城下住民における武士身分と借家数

町名	竈数A	竈数B	うち武士身分	比率	うち借家数	比率
下今宿町	95	95	47	49.4	18	18.9
紺屋町	242	242	94	38.8	39	16.1
材木町	288	288	185	64.2	148	51.3
牛島町	102	98	52	53.0	20	20.4
上今宿町	113	24	14	58.3	5	20.8
柳町		49	26	53.0	22	44.8
蓮池町		47	29	61.7	10	21.2
上芦町	80	79	31	39.2	41	51.8
高木町	164	169	86	50.8	76	44.9
呉服町	79	79	50	63.2	45	56.9
元町	47	47	31	65.9	5	10.6
東魚町	38	39	28	71.7	16	41.6
八百屋町	17	17	13	76.4	3	17.6
中島町	32	32	16	50.0	7	21.8
夕日町	41	41	22	43.1	18	43.9
勢屯町	44	45	31	68.8	20	44.4
白山町	70	71	45	63.5	37	52.1
米屋町	35	35	14	40.0	8	22.8
寺町	111	111	46	41.4	26	23.4
唐人町	106	106	53	50.0	35	41.6
唐人新町	84	84	34	40.4	18	21.4
中町	113	113	75	66.3	15	13.2
多布施町	66	66	49	74.2	4	6.0
伊勢屋町	71	71	48	67.6	31	43.6
伊勢屋本町	50	50	23	46.0	11	22.0
岸川町	85	85	31	36.4	31	36.4
西魚町	95	93	61	65.5	19	20.4
点合町	60	59	24	40.6	22	37.2
駄賃町	39	39	15	38.4	5	12.8
六座町	83	76	42	55.2	19	25.6
長瀬町	138	140	68	48.5	40	28.5
本庄町	80	80	40	50.0	18	22.5
道祖元町	87	87	50	57.4	19	21.8
多布施新宿	26	26	14	53.8	1	3.8
天佑寺町	50	50	20	40.0	18	36.0
八戸宿	170	170	99	58.2	40	23.5

注、竈数Aは竈帳に記載されている数、同じくBは計算した数である。

る。各町の竈帳を検討していくなかでこの平均の表間口をこえる町人に注目してきたが、規模の大きいのは、穀物、炭薪、材木などで、また酒屋、醤油屋、あるいは質屋なども大きい。注意しておく必要があるのは、どの商業をやっているからといってそれだけ単独の仕事に従事しているのではなく、いくつも仕事を兼ねているのがあり、また御用を引き受けている場合が多いことである。こうした有力な町人のなかには、出店だけでなく材木小屋とか細工場、酒造場などを別に持つケースも見られる。

紺屋町の蛭川藤蔵は材木屋と質屋を兼ねており、また牛嶋町の武富大右衛門も御用達と質屋を兼ねている。そして呉服町の中元寺は銀判屋でやはり質屋を兼ねている、といった事例を有力な町人の代表として提示できる。また、佐賀城下における町方をとりしきる立場にある町人頭も当然に表間口の広さや営業内容が目だっているといえる。それは下今宿町の蒲原新作とか、白山町の武富忠蔵と桂尾与平などからすると、やはり経済的にも上位の町人であるといえよう。

こうした城下でも有力な町人層の存在に対応する、下層の町人はどのように展開していたのだろうか。それを城下全体の割住居、または借家の存在状況を町ごとにみた表6をみていくことにしよう。

この借家は城下の東側と中央部の町々に比較的多く、ほぼ五〇パーセントをこしていることが表6に提示されている。これに対して西側の町々にはどこも借家の比率が低位で、一〇パーセントくらいのもある。とすると、なぜ長崎街道ぞいの町の賑わいが見られる東側や中央部の町々に借家が多く、街道から離れた脇町や裏町といわれる町々に借家が少ないのだろうか、ということが問題となってこよう。

城下の東側や中央部の町々の借家は、個々の家の割住居として付属しているケースもちろんあるが、それよりは地面一杯に借家が造られているのが注目される。この事例は材木町のところで紹介したとおりである。まともって借

家が作られるということは、そこに居住が予定される物売りや職人、そして日雇稼ぎなどの存在を町方として期待したということができよう。町方として日雇稼ぎなどを下層の余計者としてでなく、構造的にはみ出し部分としてでなく、不可欠な存在として借家が設置されたのであろう。だから町の中心部に借家が多いという事態がみられたのである。

これに対して、街道すじから離れた脇町や裏町にかえて借家が少ないのは何故だろうか。農村部に近い町外れの地域には、当然そこから流入してくる借家住まいの住民が居住していることは予想されることである。にもかかわらず借家の占める比率が低いということは、町が経済的に豊かであるというのではなく、むしろ逆で自家所有者の経済的なレベルが低いということを意味しているのではなからうか。

この街道すじから離れた脇町や裏町の住民の職業の特徴をみると、野菜物売りや肴屋、色々出売りといった農村部と関わりのある職業とか日雇稼ぎが多いのである。佐賀の城下は、全体としては整然とした都市計画にしたがって展開しているが、こうした農村部との関わりのなかではみ出していった町々が形成されたこと、そしてそこに住む人々の職業が野菜物売りなどに従事してとはいっても、彼らは自家所持者であって、借家人ではないとすると、農村部との流出入が多かったとはいえないのではないか。少なくとも農村部からの大量の流入はみられていないのである。

こうした城下の町々の住民について検討してきたところで、改めて佐賀城下の都市構成について指摘し、この章のまとめとしたい。

佐賀城下の都市構成は、明らかに博多よりの東側や中心部に穀物、炭薪、材木に関係する有力な町人層が居住している点から重点があるといえよう。そして中心部の町々には本陣や駅場が置かれ、また宿屋も多くあって、街道交通のポイントになっているところである。

城下の中心部の町々には呉服屋とか書林といった武士向けの商売が行われていたが、それらを含めて町方の有力な町人というのは、ほとんどが武士身分の足輕であつた。そしてこうした武士身分の地主に提供された借家には職人や物売り、そして日雇稼ぎが居住していたのである。街道すじから離れた脇町や裏町などには野菜物売など各種の物売りが居住しており、また藩の大砲製作所などが置かれた関係からそこへの労働力も住み着いていたのである。

注

(1) この町々の竈帳の数字についてはとりあえず池田、山本兩氏の成果を参考にしていきたい。ただ、両者の数字はかなりの誤差がある。これについては三好嘉子氏の「竈帳考」(『新郷土』八 一九八四年十一月)の指摘もあるのを考慮して、とりあえず竈帳記載の数字と一竈ごとの計算によって算出した数字とをそれぞれ表示している山本文夫氏の仕事(一章注2の論文)を参考にした。

### 三 町々「無竈」の検討

佐賀城下町々の竈帳の分析をふまえた住民構成を見てきたが、ここではこの城下町々の住民の移動状況を検討していくことにしたい。史料とするのはこれまで利用してきた竈帳の末尾に記録されている「無竈」についての調べである。なおこれまで竈帳を分析されてきた山本文男氏がごく簡単にこの竈帳の末尾の部分を利用している。

この史料は、前章のはじめに取り上げた下今宿町の竈帳でみると、その末尾に「左之人々当時無竈」と題された紙数四丁に記録されているものである。次の紺屋町でも、同じく竈帳の末尾に「当時左之人々無竈」と記した紙数五丁

(2) 蒲原については『佐賀市史』を参照した。

(3) 手名鑑については城島正祥「手名鑑と佐賀藩性格の一斑」『佐賀藩の制度と財政』文献出版 一九八〇二月) 参照した。

(4) この町絵図は佐賀県立図書館所蔵である。

(5) 『佐賀市史』を参照した。

(6) 矢守一彦『都市プランの研究』 大明堂出版

の記録が付け加えられている。その例を次にあげよう。

「 左馬之助殿歩行

禅宗

松尾 庄蔵

此兩人五六年居所不定昨今

箱川村

同子 幸太郎

与賀上郷八竜村江罷在候由

妙雲寺

こうした記載形式はこの町でもほぼ同じであるが、材木町の場合は、三冊のどの竈帳の末尾にも無竈の調べはなく、その代わりに鍋島文庫のなかに嘉永七年四月の「材木町帳内無株者名前差出帳」と題する史料が収録されている。このように竈帳の末尾に記されたのと別に作成されて提出されたとの二種類があることになる。前者は二三か町分が残されているが、別に作成されたのは材木町の一町分だけであって、すべての町の無竈について史料が残されているわけではない。

この無竈の調べでは、寺町の竈帳に「他所より参住居候人々左之通」として二人の名が記されているのが注目される。これは寺町への流入者を書き上げたものだが、詳細はわからない。他にも伊勢屋町、岸川町でも同じ性格の記事があるが、流出者とはつきりとわからない。次に注目されるのは、名前の下にある付箋の記事である。ここにはこの無竈の人々の行方がわかる限り記されている。こうした記事をとおして移動状況を検討していきたい。

以下、町ごとに無竈の状況、彼らの流出先を中心にみていくことにしたい。なお町の番号は前章で使われたものを利用した。

## 1 下今宿町

この町の無竈は一二軒の二八人で、うち武士身分の者は歩行と足軽の娘の計二軒の三人で、あとは全部町人である。

この歩行は男子一人と「此兩人五六年居所不相定、昨今与賀上郷八滝村江罷在候」と付箋が貼られている。つまり現在佐賀市南部にある与賀上郷に居住しているとみているのである。

このほか付箋が貼られているのは九竈であるが、このなかには同じ城下の町に移動しているのが四軒あり、田布施町、材木町二、牛嶋町に「引移」っている。あとは有田（西松浦郡有田町）、小城朝日町（小城郡小城町）、大立野（立野村）、川副山津村（佐賀市川副町）、木原村（佐賀市）などの町や村に居住しているのが確認されている。

## 2 紺屋町

この町の無竈は二〇軒の三十六人である。うち武士身分は八軒と下今宿町より多い。足輕が三、被官、支配がそれぞれ二で、あと歩行が一である。このうち調べ段階で居所が判明するのは六軒である。ある被官の家族六人は三人が材木町に、残りの三人は上佐賀の徳永宿へと分散している。城下の他町へ移動したのは三軒で、二軒は小城郡砥川宿（牛津町）、古瀬郷今泉村（佐賀市）へと流出している。

町人身分の一二軒は、城下の町々が二軒と、古瀬郷中佐賀（佐賀市北東部）、高木郡神代（神崎郡神代村）、川副下郷小早津（川副町）、伊万里町浦村（伊万里市）、与賀上郷鹿子村（佐賀市）などで、作方日雇いとか奉公に従事していると付箋に記されている。

## 3 材木町

前に紹介して差出帳によってこの町の無竈の状況を見ると、九軒で一七人が記載されている。このうち武士身分は一軒で、被官で肴物商売を営んでいたが、船津に居住しているという。その他の町人は、広島筋、伊万里筋、嬉野、諫早筋などへ居るらしいと記されている。そのほか材木町、紺屋町、唐人町といった城下の他町へ移動しており、一人は徒罪人である。

6 柳町

上今宿町、柳町、蓮池町の分が一冊に作られている竈帳の末尾に、柳町の分だけが横長の半紙に書かれたのが綴じ込れている。

この「無竈之人」と題したところには三軒で九人が書き上げられている。武士身分は二軒で、一つは被官で下今宿町に移っており、あとの足輕一軒は親族のところにに行っていると記されている。残りの一つは徒罪のために無竈になっている。

10 呉服町

呉服町と元町の分が一冊になっている竈帳の、それぞれの町の末尾のところに「無竈之者」という記載がある。この町の無竈は、二軒で五人が記載されている。いずれも町人で、一軒は上芦町に居住しており、他は出奔中である。

11 元町

この町の無竈は、九軒で一六人である。武士身分の者は被官と足輕の二軒で四人になる。あとはみな町人である。このうち城下の町々は六で、あとは伊万里、堺原宿（千代田町）、来迎寺村（佐賀市）である。

12~15 東魚町、八百屋町、中嶋町、夕日町

これらの町々の竈帳は一冊に収められていて、その末尾に「無竈之人左之通」として六軒で一九人の名が記されているが、町ごとの区分はされていない。武士身分は被官の一軒で、本庄村（佐賀市）に罷在りとある。町人のうち二軒は職業が大工で、牛津本町（牛津町）、早津口（川副町）におり、あとは城下の中町、米屋町などに移っている。なお一軒は行方についての記載がない。

16、18 白山町、勢屯町、米屋町

この場合も、三か町分の竈帳の記載のあとに横長の半紙に町ごとでなく一括して「無竈之人々」が記されている。ここには八軒の二〇人が記載されている。武士身分は五軒で、歩行と足輕が各二、被官一などである。このうち一軒が愛敬嶋村（佐賀市）に在るようだが、あとの六軒はみな城下の町々である。

18 寺町

竈帳の末尾に「他所罷在候人々左之通」として五軒の九人の名が記されている。全部が町人で、このうち三軒が城下の町々で、あと二軒は八戸村、本庄村（以上佐賀市）に在る。

この町の場合、竈記載と前述した他所居住の記載のあと竈人数合計があり、さらに続いて「他所より参住居候人々左之通」として二人の名があげられている。一人は高木町からの大工職、あとは久保田宿（久保田町）からの炭薪売りである。

19 唐人町

竈帳の末尾に「竈なし」として二軒の五六人がある。うち武士身分は三で、いずれも城下の町とか身内のところに居住している。あとの町人は城下の他町が一四、寺が一、あとは武雄湯町（武雄市）、尼寺宿（大和町）、愛敬嶋村（佐賀市）といったところである。

20 唐人新町

この町の竈なしは、三軒の一一人が記載されている、うち一は足輕身分である。かれらは城下の高木町に二、大中嶋（諸富町）に二が居住している。



## 21 中町

この町の竈帳の末尾に「他所え参り居候人々」として、京都へ年限切手で出掛けているのが一、次は出奔で、武士身分の者が三、町人が二である。このあとに行方の記載がない武士身分が五、町人が一ある。

## 22 多布施町

ここでも竈帳の末尾に「他所え参り居候人々」は四軒の一〇人で、武士身分が三、町人が一である。そして全部が出奔となっている。

## 23 伊勢屋町

この竈帳の末尾に「伊勢屋町帳内ニ而町内不罷在面々」が記載されている。全部で一五軒の二六人である。うち武士身分は四軒で、行方は鹿島桂園村と城下の町々である。町人は、諫早が二、今山二、あとは小田大町（杵島郡江北町）、六角宿（同郡白石町）、大野原（嬉野町）、三本松（神崎町）などが各一で、また出奔が一いる。

なお帳面の最後に「他帳内之者ニ而町内罷在メ高」として一五人という数字をあげている。

## 25 岸川町

この町の竈帳の末尾にある「岸川町帳内ニ而町内不罷在面々」には、一〇軒で、三〇人が記載されている。このうち武士身分は四で、城下の他町に一で、あとは有田山、岸川村（多久市）、で、残りは身内と伊万里に家族が分散した家である。町人は、八戸を含めた城下の町が四で、あとの一軒は多布施町と福岡村とがある。

なお竈数の合計欄には、「他帳内之者ニ而町内罷在リメ高」として一七人という数字をあげている。

## 30 長瀬町

この町の竈帳の末尾に「無竈之人左之通」として六軒で二〇人が書き上げられている。うち武士身分は一で城下の

他町に居住している。町人のなかに西国筋が三、その他は城下の他町が一、新上村が一、記載なしが一である。

### 32 道祖元町

この町の竈帳の末尾にある「竈無し」には四軒で五人である。うち武士身分は一、町人は三であるが、その行方についての記載はない。

### 35 天祐寺町

この町の竈帳の末尾に各竈の記載とは別に名前と宗旨が記載されているがあるが、これは無竈と思われる。二家三人で、うち一軒は武士身分である。この武士身分の者は呉服町に同家となっているが、町人の行方は記載がない。

### 36 八戸宿

この竈帳の末尾にある「無竈之人」によると四軒の一三人である。うち武士身分は二で、それぞれと物商売と小間物商売をしており、町人は焼き物商売と醤油売りであるが、いずれも行方についての記述はない。

この町々での無竈の人々について、前述したように山本文夫氏は城下の竈数の計算に関連して、その合計数を指摘している。この合計数は一四一軒、三九二人に達するという。竈数に比して人数が少ないのは、この無竈には単身の流出が多いためである。

この無竈の調べでわかることは、武士身分の者と町人の比べると武士身分が少ないことである。すなわち、竈帳での武士身分の者の存在は五〇パーセントをこす程に、その比率は高かったのである。ところが無竈となると武士身分の者は四九軒と五六人であって、流出全竈数の三四パーセントにとどまる。しかし、この結果は当然といえば当然といえよう。武士身分の者の方がはるかに生活基盤が強固である以上は、無竈になる可能性は少ないからである。

この武士身分の者のうち城下他町に移動しているのは、単に移動の手續きが未了になつてゐるに過ぎないということがあるので、住民移動の問題になるものではない。問題は領内外の町村への移動である。町村名が判明するのを整理すると二一か町村になる。

このうち佐賀城下の近郊が三八パーセントくらいになる。この近郊農村とのつながりの強いのは佐賀城下のなかではどちらかというと中心部の町である。そして、城下西側の町々の、農村部と強い関係にある町々の無龜の調べは、むしろ少ないくらいな状況からすると、この兩者の關係は薄いものといえよう。それよりは、町々では領内の在郷の町々への流出の方が顯著なのである。有田、伊万里、武雄湯町、そして小城朝日町、徳長宿、堺原宿、砥川宿などへの城下の町々から移動しているのである。

佐賀城下の町々から、あとは出奔しているのも多い。これは完全に行方不明になつてゐる分である。また他国でも西国筋もわずか五人で、大阪・京都、江戸にはほとんど流出していない。

こうした流出の状況からみて注目されるのは、在郷の町方との繋がりが興味をひかれるのである。つまり、こうした町方への移動と対照的に、農村との移動が意外に少ない点に注目される。この点は佐賀農村部の土地所有分解の停滞性が一つには原因するものと思われるがそれらは後考をまちたい。

